

国語科における学びの構造転換の実現に向けて

1 学びの構造転換とは何か

(1) 学びの構造転換の基本的な考え方

学びの構造転換は、以下の三側面から、学びの在り方をもう一度考え直そうとする取組である。

側面	これまで	これから
① 授業の主体	教師	学習者
② 学習の過程	一斉・一律	個別・多様
③ 教師の役割	あらかじめの教授	後追いの支援・共同探究

これらの転換により、子どもたちに、以下の三つの力を育むことを主たる目的とする。

① 真の主体性	人生と社会の主体として、自ら行動を起こす意志
② 多様包摂性	違いを認め、共に生き・生かし合おうとする意志
③ 学び方	必要な時に、必要なことを、自ら学び身に付ける力

(2) 学習指導要領の基本的な考え方

平成29年3月告示の学習指導要領は、従来の「学習内容（何を学ぶか）」に重きを置く「コンテンツベースの学び」から、「資質・能力（何ができるようになるか）」に重きを置く「コンピテンシーベースの学び」への転換を目指すものである。

育成を目指す資質・能力は、その柱を、以下の三つに定めている。すなわち、学習内容を通して資質・能力の育成を目指すのが、これからの学習指導要領の基本的な考え方である。

① 生きて働く「知識・技能」の習得
② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

(3) 学びの構造転換と学習指導要領の関係

学びの構造転換の理論体系は、学習内容を通して資質・能力を育成するために必要な「学習方法（どのように学ぶか）」について、教師の手だてをつくり出すうえでの基本的な「考え方」を提供する。

教師は、学びの構造転換を実現するために、学びを「個別化」「探究化」「協同化」し、三者の「融合」を図るための手だてを考える必要がある。

① 学びの個別化	学習者の自己選択の機会を最大化し、自己決定で学びを貫かせること
② 学びの探究化	もっと・より以上の成長を目指し、じっくりと学びに浸らせること
③ 学びの協同化	違いを認め、共に生き・生かし合いながら学びを進めさせること

学習者は、何もかもを自分で選んで決めて取り組むからこそ、もっと・より以上の成長を求めて探究に浸る。その過程で、自分だけでは乗り越えられない壁にぶつかるからこそ自ずと協同し、どんな時に、どんな人と、どのように協力すればよいかについても経験を積み重ねていく。

よって、個別化・探究化・協同化を融合した学びの構造転換の基本的な学習展開は、「自分で選び決め、探究に浸り、協同して共に生き・生かし合う」ものとなる。各教科においては、先述の学習指導要領の基本的な考え方を踏まえ、この学習展開を具体化することが必要になる。

2 国語科における学びの構造転換とは何か

(1) 学習指導要領が定める国語科の目標

小学校と中学校の学習指導要領では、国語科の目標を、以下のように定めている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、
国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す。

(2) 教科等の特質に応じた見方・考え方

働かせる「言葉による見方・考え方」は、以下のように定められている。

対象と言葉、言葉と言葉との関係を、
言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり問い直したりして、
言葉への自覚を高めること

※見方：事象に対する「問い」や「課題」を見いだすための着眼点

※考え方：着眼点の下に建てた「問い」や「課題」を解決するための思考過程

※問い：直感的な疑問 ※課題：解決する目的や方法を明確化した問い（学習課題と同義）

(3) 「読むこと」における学習展開の基本形

以上を踏まえ、「読むこと」では、学習展開の「基本形」を、以下のように定めることができる。

文章を読んで直感した内容や表現に関する疑問（問い）から、自分なりに学習課題を建て、
その解決のために、言葉による見方・考え方を働かせながら、自分たちなりの方法で探究する。

自己選択の機会が最大化され、自己決定で貫くこの展開を基本とすることで、子どもが真に学びの主体となる。課題や解決方法が多様になることで、学びを広く深くする土台ができる。つまり、一人一人の読み（解釈・分析）が多様だからこそ、それをもち寄ることで、集団全体の読み（解釈・分析）も広がり深まるということである。結果としてこれは、学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」につながり、学習内容を通じた資質・能力の育成をよりよく実現する。

教師は、子どもたちが主体の学びに後から追うように関わる「後追い」を基本姿勢にする。具体的には、共に文章を解釈し味わう「共同探究者」になったり、探究が停滞した際に文章の分析方法を教授する「ポイントレクチャー」を計画的に実施したりするなどすることで、学びをより一層広げ深める。

3 実践事例

※本資料からは省略